

少年少女
日本文学館

7

山本有三

やまもと
ゆうざう

菊池寛

きくち
かんち

ほか

ウミビコ ヤマビコ

umibiko yamabiko yamabiko yūzō



少年少女
日本文学館

7

ウニヒコヤマ

山本有三 菊池寛

ほか

講談社

山本有三 菊池 寛 宇野浩二 豊島与志雄

少年少女日本文学館 7

ウミヒコ ヤマヒコ

講談社 1987

254p 23cm

内容：兄弟 ウミヒコ ヤマヒコ こぶ 納豆合戦 三人兄弟
 身投げ救助業 春を告げる鳥 海の夢山の夢 王様の嘆
 き 天狗笑い 天下一の馬
 やまもとゆうぞう きくちかん うのこうじ とよしまよしお

少年少女日本文学館

第七卷

ウミヒコ ヤマヒコ

定価 一四四〇円

(本体 一三九八円)

一九八七年 六月 十五日 第一刷発行
 一九八九年十二月 十日 第四刷発行

著者……………山本有三 菊池 寛 宇野浩二 豊島与志雄

発行者……………加藤勝久

発行者……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五一一一(大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

製本所……………黒柳製本株式会社

©永野朋子 菊池英樹 宇野守道 豊島總子 一九八七年
 落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にておとりかえし
 ます。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部にてお願いします。

もくじ



山本有三
やまもと ゆうぞう

兄弟
きょうだい

ウミヒコ ヤマヒコ

こぶ

9

19

48

菊池 寛
きくち かん

納豆合戦
なつとうがつせん

三人兄弟
さんにんきょうだい

身投げ救助業
みな きゆうじよきよう

117

126

154



● 略年譜……………244	● 随筆……………238	● 解説……………230	豊島与志雄……………203	天狗笑い……………203	天下一の馬……………215	春を告げる鳥……………171	海の夢山の夢……………179	王様の嘆き……………188	宇野浩二……………
---------------	--------------	--------------	---------------	--------------	---------------	----------------	----------------	---------------	-----------



◆この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りかなを使用した。
- 極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

ウ
ミ
ヒ
コ
ヤ
マ
ヒ
コ



やまもと
山本有_{ゆうぞう}三

きょうだい
兄弟

ウミヒコ
こぶ
ヤマヒコ



兄きょう
弟だい

——にいさん、これそうだろう。

——どれ。

兄あにはそばにいる弟おとうとのほうをふり向むいた。そして、弟おとうとの差さし出だしたキノコを見みた。しかし、すぐ言いった。

——それはちがうよ。こういうんでなくっちゃ。

彼かれは、自分じぶんで今いまとったばかりのハツタケを、弟おとうとに示しめした。

——これ、だめ！

弟は残り惜しそうに、とったキノコをながめていた。

— あ、カサの下にぎざぎざのないのはだめだよ、ヘビダケってね、毒のキノコなんだよ。

彼はまだ十一の少年だけれど、弟に對する時は、さすがに兄らしい落ちつきと、いたわりとがあつた。

弟が少ししよげているのを見ると、彼は氣の毒になつた。それでボール・パンのような色をした、ハツタケのあたまを見つけると、すぐに弟に教えてやつた。

— 真ちゃん、そこにあるよ。

弟はそれを聞くと、元氣づいてそこらを見まわした。しかし、しら茶けた落ち葉のほかには、なんにも目にはいるものはなかつた。兄はかさねて言つた。

— そら、そこにさ。真ちゃんの足もとんとところに。

— どこに。

— これさ。

と、兄は弟のそばに寄つてきて指さした。

— 葉っぱでわからないんだもの。これ？

弟はおとうと
は落ち葉を払いのけて言った。

— あ。

— 毒ダケじゃない？

— ううん、これがほんとのハツタケだよ。

— ぼく、とつてもいい。

— いいとも。

弟はおとうと
はかがんでハツタケを抜いた。しかし、無気味な虫でもつかんだ時のように、あわててキノ
コを放してしまった。

— なんだって捨てつちまうの、真ちゃん。

兄はなに
（問いつめて責める）
はなじるように言った。

— だって、こわいんだもの。

— 何がさ？

弟はおとうと
はうつむいたまま黙っていた。

兄はなに
微笑が浮かんできた。

——ああ、キノコの色が**変わ**ったんで、**驚**いたんだね。なあに、そりや、なんでもないんだよ。
ハツタケは、さわるとすぐ色**が**変わるんだよ。

——じゃ、大丈夫？

——大丈夫さ。

弟は、やつと安心したというふうであつた。

——もつたいない。こんなかへ入れときよ。

兄はザルの代わりに、地上に裏がえしにして置いてある、自分の帽子をさした。弟は拾つて、その中へ入れた。それから、ついでに、兄がとつた、帽子の中のキノコの数を、数えてみた。

そのあいだに、兄は落ち葉をかきつかせながら、あつちこつちハツタケをあきつていた。兄が目をきよろきよろさせているようすは、ちようど、朝、おばあさんが背なかを丸くして、ふとんの上で、ノミを追いかける格好とよく似ていた。弟はそれを見ると、わけもなく、うれしい氣もちになつてきた。そして、自分もまたすぐに背なかと目だまをまあるくして、タケ狩りをやりだした。もちろん、弟は兄の四半分もとれなかつたけれど、マツ林の中をはねまわつて歩くことは、なんと言つても、彼には愉快でたまらなかつた。

ハツタケ（九ページ）

夏から秋にかけて、あかまつ林の中にはえるきのこ。淡い赤褐色だが、傷ついたところが青緑色に変わるため、藍茸ともよばれる。味がよい。



ノミ
人や家畜などの肌について血を吸う、茶色い小さな昆虫。体長二―三ミリメートル。よく発達した後ろ足で遠くまでジャンプすることができ。

突然ドシーンという響きがした。兄はふいと目をあげると、一間

ばかり先の、少し傾斜になっている地面の上を、弟はころころとこ

ろがっていた。おそらく、木の根が何かにつまずいたのだろう。は

ずみをくらって、ころがりだしたものらしい。それを見ると、兄は

思わずふきだしてしまった。弟が目の前で倒れたのだから、すぐに

も駆けて行って、起こしてやるのが当然なのだが、その瞬間には、

「弟」とか、「起こす」とかいう考えは、まるでなかった。それど

ころか、手を打って、はやしたてたいような気もちでいっぱいだっ

た。しかし、つぎの瞬間には、もう弟のそばにいた。そして、木

の根かたでとまった、弟のからだを引き起こした。

その時の彼は、いたわりふかい兄であった。彼は心配にふるえな

がら、弟を介抱した。ところが、弟は起きあがると、兄の顔を見

るなり、にやりと笑った。すると兄の顔もまた、ひとりでにほえ

んでしまった。泣きだすと思った弟が笑ったものだから、兄は急

に気が軽くなった。

弟は起きあがるとすぐに、笑えたくらいだから、どこもけがはしていなかった。しかし、彼の笑いは妙ちきりんな笑いだった。もちろん、しくじりをやったあとの、てれかくし笑いに相違ないのだが、それにしても、どこかへんところがあつた。よく見ると、それは弟の右のほつぺたに、したたか、どろがついていたからだつた。おそらく、倒れた時にくつついたものだろう。兄はそれを知ると、すぐに指でどろを落としてやった。けれども、よく落ちないので、筒そでの中に手を引っこめて、それでほつぺたをこすつてやった。ところが、それでも、すっかりきれいにならないものだから、今度は彼は、筒そでの先につばをくつつけて、丁寧にふいてやった。そのあいだ、弟はおとなしくして、兄のやつてくれるままになっていた。

それから、ふたりはまたタケ狩りをやりだした。

しばらくしてから、兄はハツタケでいっぱいになっている帽子を取りあげて、得意そうに言った。

——真ちゃん、こんなにとつたよ。

その時、突然うしろで大きな声がした。